高塚遺跡第2次発掘調査概要報告書

榛原町文化財調査概要 3

1989

榛原町教育委員会

例　　言

1　本書は、奈良県宇陀郡榛原町大字高塚に位置する高塚遺跡の試掘調査および立会調査の結果を収録した調査概要報告書である。

2　調査は、奈良県宇陀川浄化センターの依頼をうけて奈良県立橿原考古学研究所、榛原町教育委員会が実施した。なお、現地調査は奈良県立橿原考古学研究所　伊藤勇輔氏の指導のもと、榛原町教育委員会技師　柳沢一宏が担当した。

3　図7の調査位置図は、奈良県宇陀川浄化センター、榛原町役場農地開拓課が作成した測量図を一部改変、合成したものである。

4　本書は奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所の指導、協力のもと、柳沢が執筆、編集を担当した。

目　　次

第１章　調査の契機と経過……　1
　　1　調査史抄……　1
　　2　調査の契機と経過……　4
　　3　現地調査日誌抄……　5

第２章　位置と環境……　6
　　1　地理的環境……　6
　　2　歴史的環境……　6

第３章　調査概要……　9

第４章　出土遺物……　14

第５章　ま　と　め……　16

第１章　調査の契機と経過

１　調査史抄

ここに報告する高塚遺跡は、奈良県宇陀郡榛原町大字高塚に広がっており、現在は、畑地、水田、宅地、道路等となっている。今回の調査結果を述べる前に、この遺跡の「履歴」を簡単に辿っておきたい。

高塚遺跡の存在が一般に明らかとなったのは、1938年（昭和13年）に発表された２扁の報告からであった。

島本一氏は『大和志』のなかで「大和國宇陀郡伊那佐村高塚の彌生式土器」と題して当時の遺跡の概要を記している。これによると、人家がある南斜面で東西に走る道路が敷設されたところ、この道の両側で黒色の遺物包含層が露出し、遺跡の存在が明らかとなっている。道路法面での基本層序は、厚さ３・４尺の表土（約90・120㎝）、厚さ３尺の黒色包含層（約90㎝）となっており、黒色包含層は東西15尺（約455㎝）、南北15・16尺（約455・485㎝）の範囲に広がっている。この包含層の詳細は明らかでないが、竪穴状の遺構が推定されている。ちょうど道路が遺跡を南北に分断した格好となっており、この工事にともなって石鏃、後期の土器類、槍状の木製品、胡桃・梅・桃・栗・桜皮の自然遺物などが出土している。

また、藤野勝彌氏は1937年（昭和12年）６月に遺跡の一部を調査し、翌年、『考古學』のなかでその調査概要を報告している。道路北側の法面では、地表から約２尺（約60㎝）の深さのところで風化花崗岩を穿った竪穴状遺構が認められる（図１）。この幅は約13尺（約394㎝）、深さ約３尺（約91㎝）をはかる。この遺構は反対側の道路南側の法面でも確認でき、道路によって削られた格好となっている。黒褐色有機質土の埋土は３～４層に大別されるようで、より下層のほうが多くの土器、木製品、自然遺物等を含んでいる。ここに小規模なトレンチ（幅約60㎝）が設定され、壺、高杯、鉢、甕、などの弥生式土器（図２）、サヌカイト製の石鏃、加工された木製品、胡桃、桃、栗、瓢箪等の自然遺物などが検出されている。また、一部には、多量の木炭片を含んだ凝灰土も認められる。

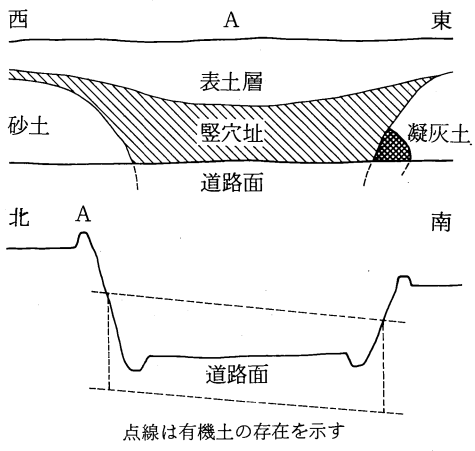


図１　竪穴状遺構略図（拠『考古学』９－３）

これらの２報告は、いずれもほぼ同様の地点についての記述と推定されるが、その正確な場所は現在、明らかでない。なお、竪穴状の遺構は、その検出状況及び遺物の出土状態から住居跡ではなく、北から南へと流れる溝であった可能性が高い。

地元、高塚の松岡氏は、以前からこの遺跡から出土する遺物を採集・保管されており、この一部が

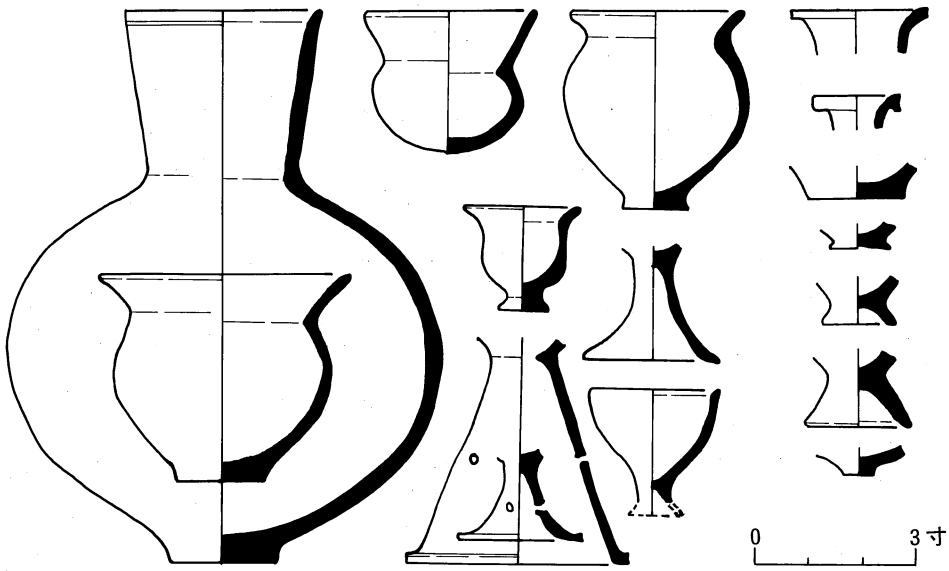


図２　高塚遺跡出土土器実測図（拠『考古学』９－３）

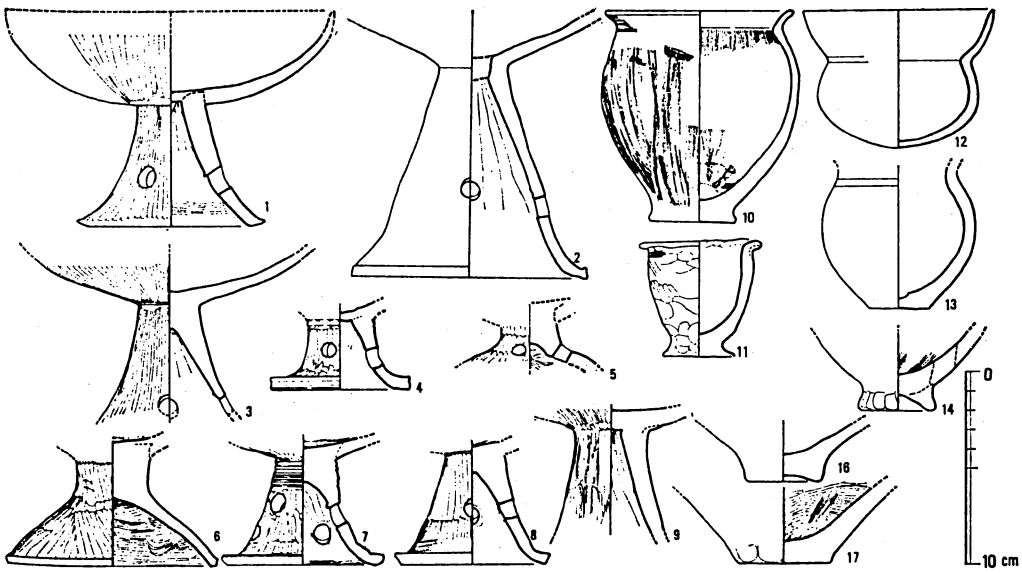


図３　高塚遺跡出土土器実測図（拠『大王山遺跡』）

1959年に刊行された『榛原町史』のなかで実測図と写真で紹介されている。その後、1977年に刊行された『大王山遺跡』の「宇陀地方の弥生時代遺跡」のなかで、先の遺物を含めた弥生時代後期から古墳時代前期の土器16点、鍬や棒状に加工された木製品３点の実測図が収録されている（図３・４）。

1971年11月には県道拡張工事にともない、奈良県教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所によって試掘調査がおこなわれた。水田の８カ所にトレンチが設定され、東方２カ所のトレンチでは、表土下は地山となっていたが、他のトレンチでは厚さ２～30㎝の遺物包含層が検出されている。遺構は２条の溝、数カ所の小ピット等が確認されている。このうち、溝のひとつ（東溝）は南北方向に穿って形成されていた。その規模は幅２ｍ、深さ0.7ｍをはかり、溝埋土は４層に大別されている。集落を画する溝とも考えられるが、明らかではない。

出土遺物は、弥生時代後期の土器で大半を占めるが、一部、中期末の土器も含まれているようである。この他、銅鏃、木製脚付盤、石包丁形木製品（木包丁）、ガラス玉等が出土している。石包丁形木製品は明瞭な使用痕が認められ、石包丁と同様に扱われた好例として注目された。小規模な発掘調査ではあったが、貴重な遺構、遺物を検出したこの遺跡は、宇陀地方の代表的な弥生遺跡であることが再認識され、さらに重要な位置を占めるに至った。

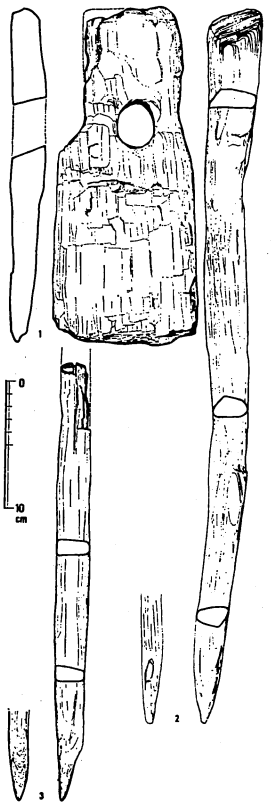


図４　高塚遺跡出土木製品
実測図（拠『大王山遺跡』）

なお、この道路拡幅工事前までは、道路法面に遺物包含層が露出していたようであるが、これ以降は各所に盛土、擁壁が施され、これを直接、観察することはできない。

参考文献

島本　一「大和国宇陀郡伊那佐村高塚の彌生式土器」　『大和志』５－３　大和国史会　1938
藤野勝彌「奈良県宇陀郡伊那佐村高塚彌生式遺跡」　『考古学』９－３　東京考古学会　1938
『榛原町史』　榛原町役場　1959
河上邦彦「高塚彌生遺跡の発掘調査」　『青陵』第19号　奈良県立橿原考古学研究所　1972
伊藤勇輔他『大王山遺跡』　榛原町教育委員会　1977

2　調査の契機と経過

榛原町と菟田野町とを結ぶ主要道路のひとつである県道榛原・菟田野線では1984年度以降、奈良県宇陀川浄化センターによって下水道工事が実施されている。1987年には高塚遺跡の東端とも推定される道路敷において、その工事が行われることとなり、工事と並行して立会調査を実施したが、芳野川の氾濫原のみで明確な遺構・遺物は検出されなかった。

1988年度には、高塚遺跡発見の契機となった県道高塚・野依線においても下水道工事が実施されることとなり、1988年10月に奈良県宇陀川浄化センターから「埋蔵文化財発掘通知」が提出された。その後、奈良県教育委員会、榛原町教育委員会、奈良県宇陀川浄化センター等の関係機関が工事および遺跡の取り扱いについて協議を重ねた。工事は、立坑を設定する推進工法と開削工法の２種類が予定されており、推進工法をとる立坑部分については発掘調査、開削部分については立会調査を実施することとなった。また、現地調査は奈良県立橿原考古学研究所の指導、協力を得て榛原町教育委員会が担当することとなり、重要な遺構・遺物等が発見されれば、その保存等についても改めて協議することとした。

現地調査は、1989年１月21日から３月30日にかけて実施したが、他遺跡の調査日程および工事日程等の関係から、断続的なものとなった。この経過については次節、調査結果については第３・４章を参照されたい。

なお、この調査にあたっては、多くの機関、諸氏に多大な御協力、御援助をいただいた。現地調査から資料整理、報告書刊行に至るまでの関係者等の芳名を次に記し、謝意にかえたい。（敬称略）

調 査 指 導　奈良県教育委員会　文化財保存課、奈良県立橿原考古学研究所　調査課
事　務　局　奈良県立橿原考古学研究所　総務課
現 地 調 査　榛原町教育委員会　社会教育課
調査補助員　杉本淳子、高田昭年、筒井義和、井上好美、山本文子、
調 査 協 力　奈良県宇陀川浄化センター、榛原町役場　農地開拓課、泉岡建設株式会社、株式会社パスコ、株式会社ジェクト
泉森　皎、楠元哲夫、林部　均、竹田政敬

3　現地調査日誌抄

試掘調査

1989年（平成元年）

1月21日（土）くもり時々晴
第1トレンチ（No.1立坑）の調査開始。土層断面図作成。写真撮影。

1月24日（火）くもりのち晴
第1トレンチ（No.1立坑）の写真撮影。調査位置図作成。

1月25日（水）晴
標高ポイントの設置。遺跡内の水田踏査。

2月14日（火）晴
第2トレンチ（No.2立坑）の調査開始。遺構・遺物検出作業。土層断面図作成。写真撮影。

2月15日（水）晴
第2トレンチ（No.2立坑）の写真撮影。遺構・遺物検出業。

2月20日（月）晴
第2トレンチ（No.2立坑）の掘り下げ。遺構・遺物検出作業。

2月21日（火）くもりのち雨
第2トレンチ（No.2立坑）の掘り下げ。遺構・遺物検出作業。土層断面図加筆。写真撮影
午後、降雨のため作業中止。

2月22日（水）くもりのち晴
第2トレンチ（No.2立坑）遺構・遺物検出作業。土層断面図加筆。写真撮影。

2月23日（木）晴
第2トレンチ（No.2立坑）調査位置図作成。

2月27日（水）晴
第2トレンチ（No.2立坑）遺構・遺物検出作業。試掘調査が終了。

立会調査

3月 1日（水）くもり時々晴
No.3～No.4地点の立会。遺物確認作業

3月 2日（木）晴
No.3～No.4地点の立会。写真撮影。

3月 3日（金）晴
No.4地点周辺の立会。土層断面図作成。地山直上に遺物包含層。

3月10日（金）晴
No.4～No.5地点の立会。土層断面図作成。写真撮影。

3月14日（火）くもりのち晴
No.5地点周辺の立会。土層断面図作成。写真撮影。

3月20日（月）晴のちくもり
No.4～No.5地点の立会。写真撮影。遺物確認作業。

3月22日（水）晴
No.5～No.6地点の立会。写真撮影。土層断面図作成。

3月30日（木）晴
No.2～No.3地点の立会。写真撮影。土層断面図作成。遺物検出作業。
立会調査が終了。

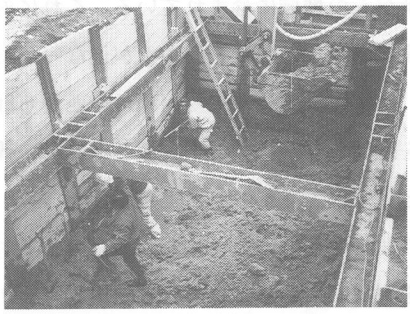


写真1　第2トレンチ調査風景

写真2　立会調査風景

写真3　工事風景

第2章　位置と環境

1　地理的環境

大和盆地東方の山間部に宇陀と呼ばれている地域が広がっており、現在の行政区画では、大宇陀町、榛原町、菟田野町、室生村、曽爾村、御杖村からなっている。この宇陀地方は、地理的な状況から西半と東半に大別でき、一般に前者が「口宇陀」、後者が「奥宇陀」と呼ばれている。口宇陀は標高300～400 mの丘陵とこの間を縫って流れる中小河川が複雑に入り乱れ、これらがいくつもの小盆地や浅い谷地形を形成している。口宇陀盆地とも称され、大宇陀町、榛原町、菟田野町の大半がこの地域に含まれている。これに対し、東部の奥宇陀は室生山地（室生火山群の火山地形）、高見山系などの峻しい山々が連なっており、奥宇陀山地とも呼称されている。

口宇陀を流れる主要河川は、西から順に宇陀川、芳野川、内牧川があり、これらは小盆地や谷部を蛇行しながら他の小支流をあわせ、榛原町でさらに広い宇陀川となる。その後、宇陀川は北東へと流れ、三重県へ至って名張川となり、木津川、淀川を経て遠く大阪湾へとそそいでいる。口宇陀の西には龍門山地が横たわるため、これが大和盆地との分水界となっており、大和川流域とは水系を異にしている。また、宇陀川と芳野川との間には吉野の山塊から延びてくる標高320～430 mの丘陵が横たわり、これらの尾根稜線を境として、現在の大宇陀町と榛原町、菟田野町との行政区画としている。

高塚遺跡は、この丘陵の東側、芳野川中流域の左岸に広がっている。

図5　榛原町位置図

2　歴史的環境

宇陀地方、なかでも口宇陀地域には縄文時代以降、各所で多くの人々が生活を繰り返している。その痕跡を今、我々は「遺跡」と呼んでいるが、近年、これらは多くの開発行為によって改変・消滅しつつあり、これにともなう調査件数も増加の一途にある。発掘調査によって新しい見知が得られる反面、貴重な遺跡は消え去り、「記録」だけが後世に伝えられつつある。また、宇陀地方は、『古事記』、『日本書紀』などにも度々記され、今に伝える地名、伝承等も多い。

縄文時代の遺跡の多くは宇陀川、芳野川、内牧川流域の河岸段丘上、尾根上、谷部等

に認められる。高井遺跡では、ほぼ全面的な発掘調査を実施し、早期から後期に至る多くの遺構・遺物を確認し、内牧川流域の母集落のひとつであったことが明らかとなっている。高塚遺跡が位置する芳野川流域では、縄文時代後期から晩期の遺跡が点在している。

弥生時代前期の遺跡は、これまでに調子遺跡、沢遺跡、下城・馬場遺跡、大貝ヒジキ山遺跡、上井足北出遺跡、小附廃寺遺跡が確認されている。いずれも数点の土器片を確認したのみではあるが、宇陀川・芳野川流域で最も早く、弥生文化に接したところとして注目される。中期となると、先の遺跡のほか、宇賀志遺跡、松井こぶの木遺跡、馬場田遺跡、三角遺跡、高塚遺跡、池上所在の遺跡、能峠中島遺跡、神木坂遺跡、五津・峰畑遺跡などと増加傾向にある。沢遺跡や大貝ヒジキ山遺跡の場合、第Ⅲ様式の土器が最も多く見うけられる。後期の遺跡数となるとこれまでになく、著しく増え、現在確認されている弥生遺跡のほとんどがこの時期に属するといっても過言ではない。これは汎日本的な現象でもあり、口宇陀地方にもその動向がうかがえる。なかでも、宇陀川・芳野川流域の小支流域とその谷部周辺、低丘陵上に多くの生活痕が認められる。しかし、地理的な制約のためか「国中」で見られるような大規模集落は今までのところ確認されていない。

弥生時代終末から古墳時代前期の墓制である方形台状墓の次に出現してくる古墳としては、前期末の谷畑古墳が知られている。中期の古墳では、能峠前山１号墳、篠楽向山古墳、シメン坂１号墳、愛宕山古墳等をあげることができる。口宇陀地方の尾根上に散在して築造されていた古墳は、５世紀中頃～後半になるとさらに多く造られるようになり、この時期以降、それぞれが群を構成するようになってくる。発掘調査により野山古墳群、栗谷トノヤシキ古墳群、大王山古墳群、平尾東古墳群、後出古墳群、丹切古墳群、神木坂古墳群、奥ノ芝古墳群をはじめ、多くの古墳が確認されている。

奈良時代には、これまでの横穴式石室から次の新しい葬法である火葬墓が出現する。宇陀地方では、文祢麻呂墓、岩尾火葬墓、拾生火葬墓が知られている。その他、奈良・平安時代の墳墓は、土器棺、火葬墓等が各所で確認されているが、その数は多くない。

高塚遺跡の北方約200ｍとところには八咫烏神社が鎮座しており、『続日本紀』の慶雲二年(705年)九月丙戌条には「置八咫烏神社于大倭国宇太郡祭之」と記されている。このことによって、奈良時代にはこの神社の成立をうかがうことができる。

中世の城館跡は、秋山城、沢城、芳野城をはじめとして、郡内各所の尾根上に認められるが、発掘調査によってその全容が明らかとなった例は少なく、福地城跡、栗谷トノヤシキ城館跡、上井足殿垣内城跡などを数えるにすぎない。高塚遺跡の西方にも福西城跡が存在するが、まだ詳細な調査は実施されていない。また、北方には、11世紀から16世紀に営まれた福西灌頂寺跡が確認されている。中・近世墓も多く調査され、周辺だけでも栗谷遺跡群、八咫烏遺跡群などでその存在明らかとなっている。

（参考文献等省略）

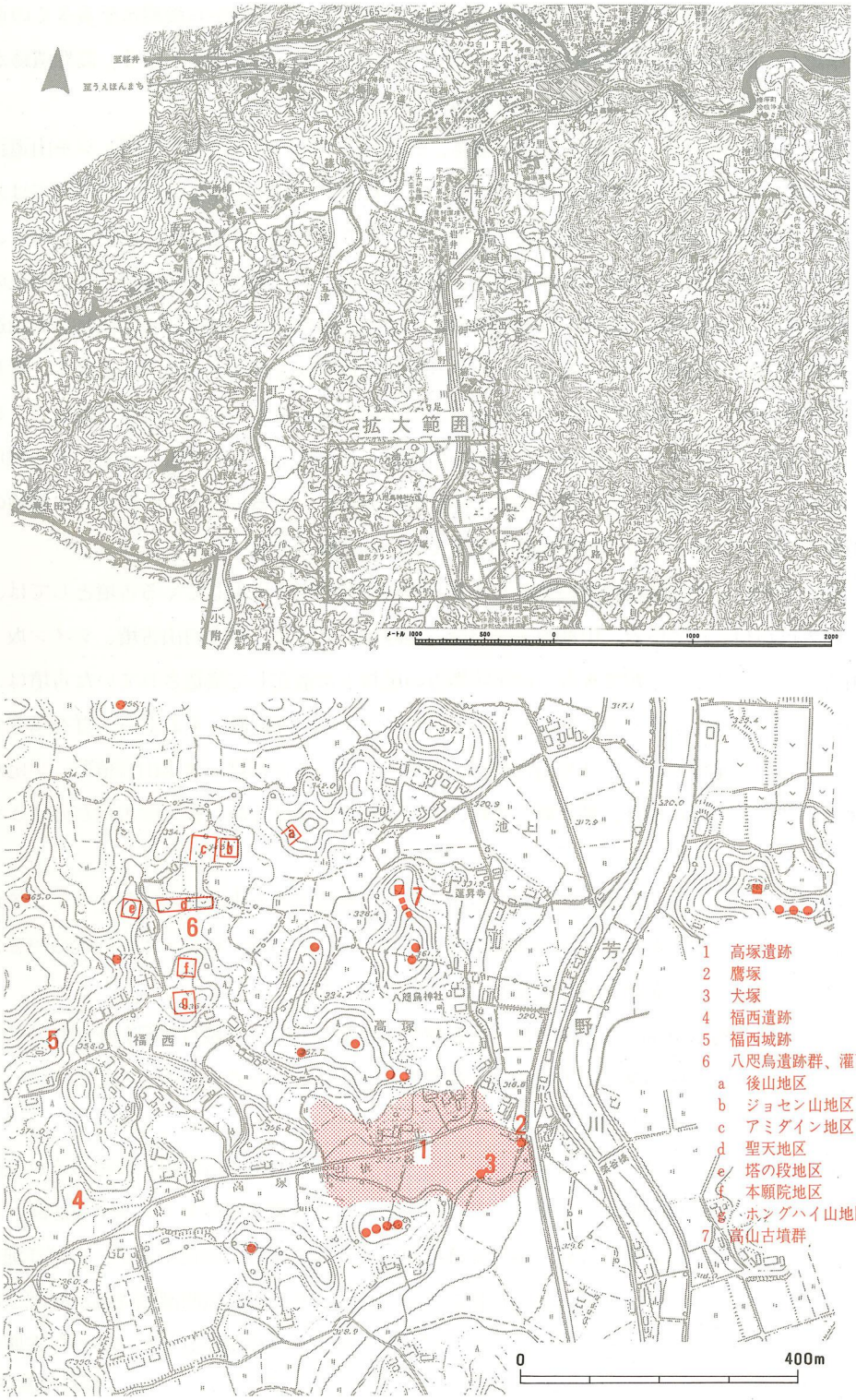

拡大範囲
1 高塚遺跡
2 鷹塚
3 大塚
4 福西遺跡
5 福西城跡
6 八咫烏遺跡群、灌頂寺跡
a 後山地区
b ジョセン山地区
c アミダイン地区
d 聖天地区
e 塔の段地区
f 本願院地区
g ホングハイ山地区
7 高山古墳群
0
400m

図6　高塚遺跡位置図

第3章　調　査　概　要

下水道工事が実施される県道は、高塚遺跡のほぼ中央部を東西に走り、丘陵部と谷部との境界を縫って敷設されている。このため遺跡は、北側の北陵部と南側の谷部に大きく分断された格好となっている。今回の調査は、遺跡の範囲確認を目的とし、遺構・遺物の検出に努めることとした。調査の大半は重機等の機械力に頼り、遺物等が出土すれば人力によって作業を進めていった。

発掘調査（試掘調査）は立坑掘削部分の2箇所で実施し、東から順に第1トレンチ、第2トレンチと呼称する。また、立会調査は、第2トレンチ西隣から西方へ延長約200 mの開削工事が行われる部分において実施し、このうち5地点（A～E地点）で土層断面図を作成した。

1.　発掘調査

第1トレンチ

長径5.8 m、短径3.0 mの立坑を設定するのに伴って、この中心部分において調査を行った。基本層序はアスファルト（第1層）、砕石（第2層）、盛土（第3層）、青灰色粘土（第4層）、灰黄色粘土（第5層）、暗青灰色粘土（第6層）、黄灰色砂（第7層）、茶灰色砂（第8層）、風化花崗岩（第9層）となっている。道路面から風化花崗岩上面までは2.5 mをはかる。なお、第1層から第3層は、道路建設に伴うもので、後述の各層序に共通している。

写真4　第1トレンチ土層断面

風化花崗岩が露出する谷地形を検出したものの、明確な遺構、遺物は認められなかった。また、トレンチの南側には「鷹塚」が築かれているが、これに伴うような遺構も検出されなかった。

第2トレンチ

長さ7.6 m、幅4.0 mの立坑部分をほぼ全面にわたって掘り下げた。基本層序は旧耕作土（第4層）、黄灰色粘土（第5層）、青灰色粘土（第6層）、暗青灰色粘土（第7層）、淡黄灰色砂（第8層）、灰色砂（第9層）、暗灰色砂（第10層）、花崗岩（第11層）となっている。道路面から花崗岩上面までの深さは3.8 mをはかる。第6層から第10層にかけて若干の土器片が出土しており、第10層出土の弥生土器　高杯（図9－1）は摩滅が著しい。第1トレンチとほぼ同様の谷地形の一部を検出しており、トレンチ北西隅では花崗岩塊が勾配をもって上方にのびている。護岸施設、堰などの工作物は認められない。

2.　立会調査

A地点

基本層序は暗青灰色粘土（第4層）、風化花崗岩（第5層）となっており、道路面から風化花崗岩上面までは1.5 mの深さをはかる。

B地点

基本層序は旧耕作土（第4層）、灰黄色砂（第5層）、暗青灰色粘土（第6層）、風化花崗岩（第7層）である。道路面から風化花崗岩面までは0.95mの深さをはかる。

C地点

基本層序は旧耕作土（第4層）、灰色粘土（第5層）、暗青灰色粘土(第6層)、花崗岩(第7層)である。道路面から花崗岩面までの深さは1.6mをはかる。

D地点

基本層序は青灰色粘土（第4層）、風化花崗岩（第5層）、風化花崗岩（第6層）である。道路面から風化花崗岩面までは1.8mをはかる。

E地点

基本層序は青灰色粘土（第4層）、風化花崗岩（第5層）で、道路面から風化花崗岩面までは2mをはかる。

以上、延長約200mの立会調査を行い、5箇所において土層断面図を作成した。いずれも幅が0.8mと限られた範囲であったため、明確な遺構は検出されなかったが、暗青灰色粘土中からは弥生時代後期から古墳時代前期の土器片が若干、出土している。

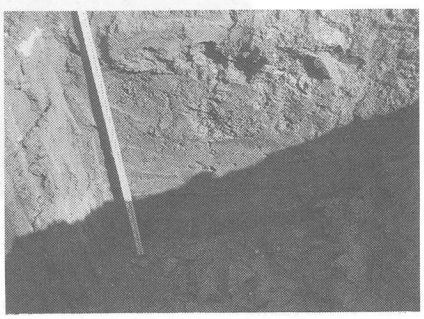


写真5　第2トレンチ土層断面(1)

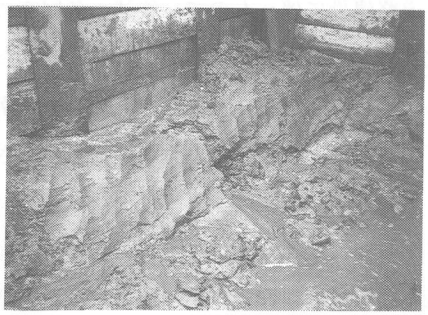


写真6　第2トレンチ土層断面(2)

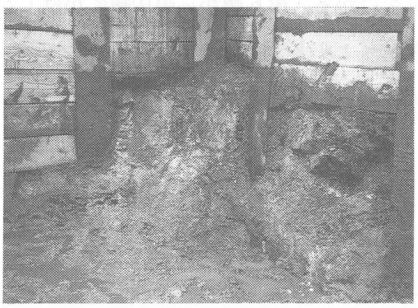


写真7　第2トレンチ北西岩盤

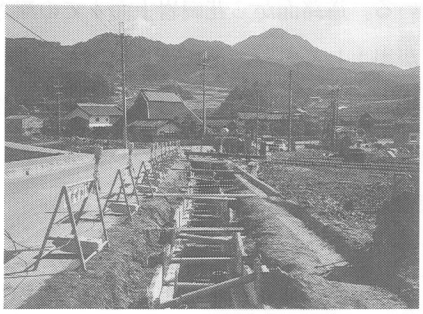


写真8　立会調査地

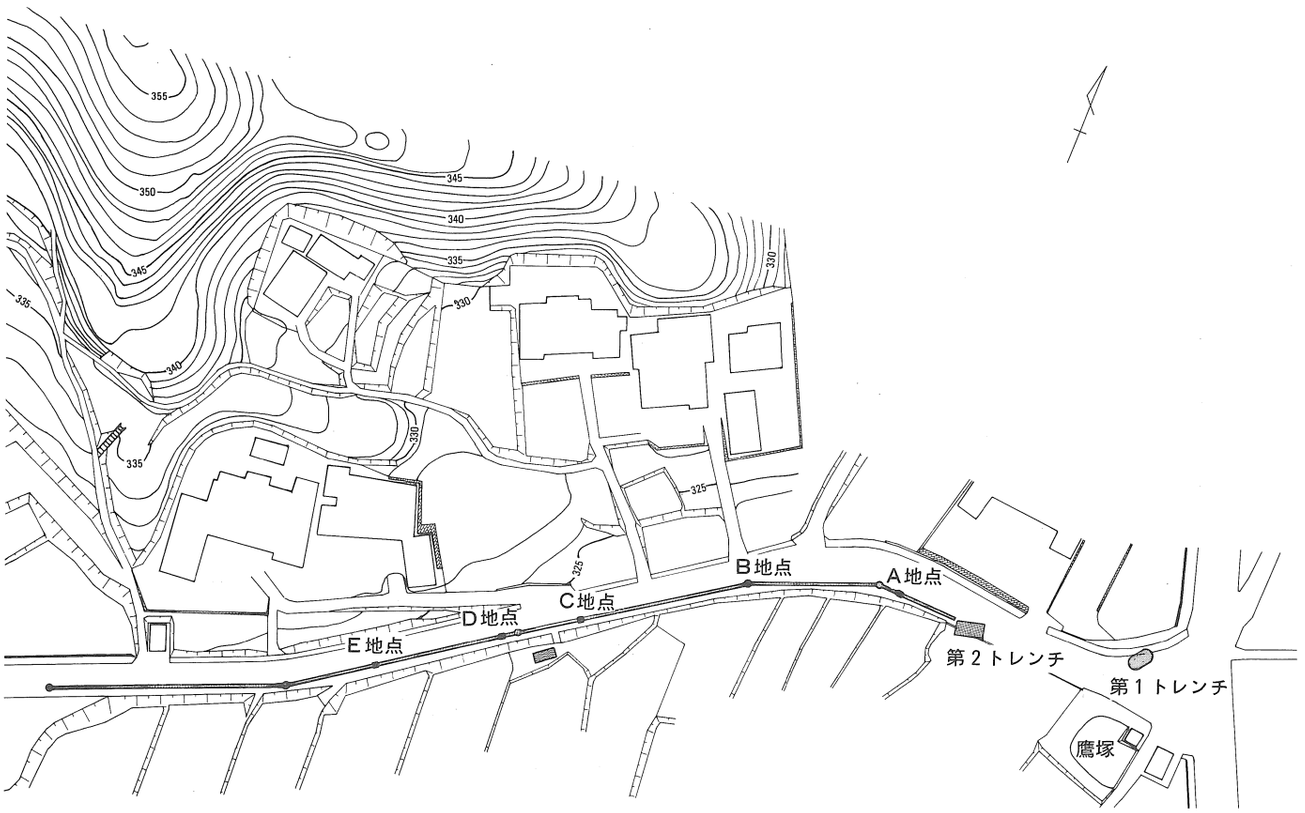


図７　高塚遺跡第２次調査位置図　（縮尺　1/1500）

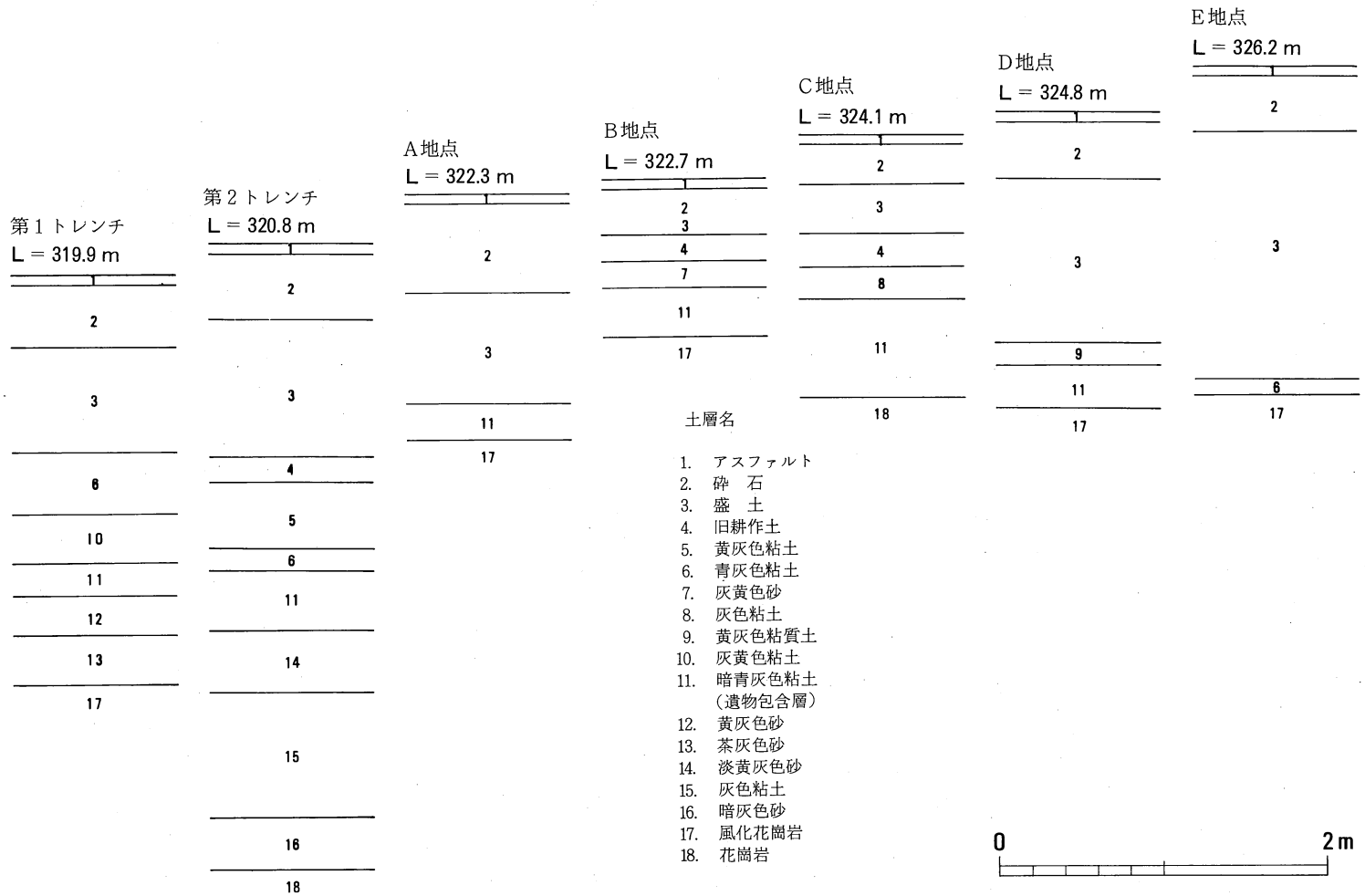


図8　高塚遺跡第2次調査基本土層断面図

第4章　出　土　遺　物

第2トレンチからD地点までの各所で弥生時代から中世に至る土器片が出土しており、その量数は整理箱1箱分である。これらの土器は、弥生土器、古式土師器、須恵器、土師器などであるが、ほとんどが細片となっており、図化し得たものは僅かである。

弥生土器

壺、高杯、器台、甕、鉢、手焙形土器などの破片を検出している。

高杯（図9－1、図版3－1）

口縁端部及び脚裾部を欠いており、内外面とも非常に摩滅が著しい。杯部は椀状を呈する。脚部は中空で、内面には、しぼり目が認められる。裾部には円形の4方向透かしが認められる。杯部外面及び脚部外面には、タテ方向のヘラミガキ、杯部内面には、一定方向のヘラミガキが施されている。杯部と脚部との接合法は、円板充塡法によっている。現存高は6.3 cmをはかり、色調は灰褐色を呈する。第2トレンチ最下層（10層）の暗灰色砂からの出土である。

器台（図9－2、図版3－2）

受部の破片で、この口径は15.2cmに復元できる。内外面とも摩滅が著しいが、外面はタテ方向のヘラミガキ、内面はナデ、端部にはヨコナデ調整を施している。色調は灰黄褐色を呈する。C～D地点間からの出土である。

甕　（図9－3、図版3－3）

口縁部から体部にかけての破片である。復元口径10.2cm、復元体部径10.6cmとやや体部のほうが

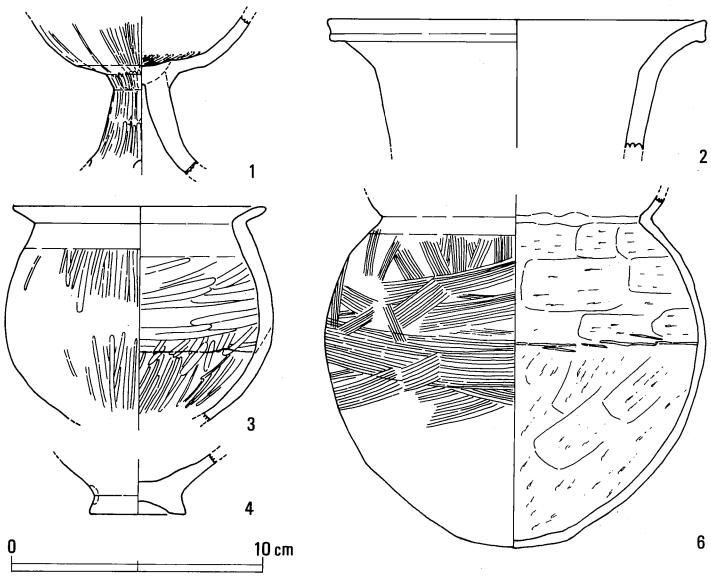


図9　高塚遺跡第2次調査出土土器

大きいが、総じてほぼ同じといえる。口縁部は「く」字状に屈曲し、その端部は丸い。体部中位から下半に最大径があり、体部の形態は球形を呈する。体部外面、体部内面下半にはタテ方向のヘラミガキ、体部内面上半にはヨコ方向のヘラミガキ、口縁端部内外面にはナデが施されている。体部内面の中位よりやや下方には接合痕が認められ、また、外面のほぼ全面には煤が付着している。B～C地点間からの出土である。

底部（図9－4、図版3－4）

突出したあげ底を呈し、その径は3.3㎝をはかる。内外面とも摩滅が著しいが、内面はハケ、外面には指頭圧痕が僅かに認められる。鉢の底部であろうか。内面はにぶい黄橙色、外面はにぶい橙色を呈する。C～D地点間から出土している。

古式土師器

高杯（図版3－5）

大きく裾の開いた脚部の破片で、なかほどには、径約1㎝の透かしが認められる。3方透かしであろうか。内外面とも摩滅が著しいが、内面には、粗いハケ目が認められる。色調は橙色を呈する。第2トレンチ～A地点間の出土である。

甕　（図9－6、図版3－6）

体部の約1／2が残存する破片である。体部最大径は、ほぼ中位にあり、その径は15.2㎝に復元できる。この形状は、ほぼ球形を呈し、底部はやや尖り気味となっている。体部外面の肩部周辺にはヨコ方向の刷毛目、その他はタテ方向の刷毛目が施されている。また、体部内面下半にはタテ方向、上半にはヨコ方向のヘラ削りが施され、器壁の厚さは3～4㎜に仕上げられている。口縁部内外面にはヨコナデ調整が施されている。底部内面には、指頭圧痕が認められる。外面には、ほぼ全体にわたって煤が付着しているが、特に体部下半部にその傾向が著しい。C～D地点間の包含層からの出土である。

第5章　ま　と　め

今回の調査は、下水道工事にともなう事前調査であったため、調査面積が非常に限られたものとなった。調査地が遺跡内を東西に横断する格好となるため、遺跡の範囲確認につとめ、その概要は先述のとおりである。

高塚遺跡は、これまでの出土遺物から弥生時代中期から弥生時代後期に営まれた集落と考えられているが、今回の調査では、弥生時代後期、古墳時代前期の土器片が出土している。後者の古式土師器は布留1式に比定され、集落の存続時期を推定する資料となるといえよう。また、細片ではあるが、高台を有する須恵器・杯身が出土しており、この周辺に奈良～平安時代頃の遺構の存在も予想できる。

周辺踏査及び調査結果から高塚遺跡の旧地形を復元すると、図10のような谷地形と丘地形が考えられる。谷地形は西方から東の芳野川へと続き、現在、この大半は水田となっており、容易にその範囲が推定できる。一方、丘地形からは、以前から弥生時代を中心とする遺物が出土しており、住居跡などの遺構の存在がこの周辺に予想される。丘地形はA地点～C地点の南側まで形成されていたと推定されるが、いつの頃か削平され、今に至っている。旧地形および遺物の散布状況から高塚遺跡の東限は第2トレンチ～A地点の間、西限はD地点周辺、北限は住宅となっている尾根裾部と考えられる。南側の谷地形では、ほぼ全体にわたって遺物が散布しているが、現状では詳細な範囲を明かにできない。水田遺構や灌漑施設など、谷地形を利用した遺構が存在するのであろうか。

また、谷部のほぼ中央には、「鷹塚」、「犬塚」などとよばれる古墳が存在する。周辺の古墳はすべて尾根上に築かれているが、この2古墳だけが埋没した谷地形上に位置し、様相を異にしている。これらは、近世の古墳でない塚とも考えられ、今後の調査に期するところが大きい。

種々の課題を残したまま、2次調査は終了した。さらに遺跡の範囲、遺構・遺物の有無を明確にする発掘調査を重ね、集落の全容を明かにしていかなければならないと考えている。

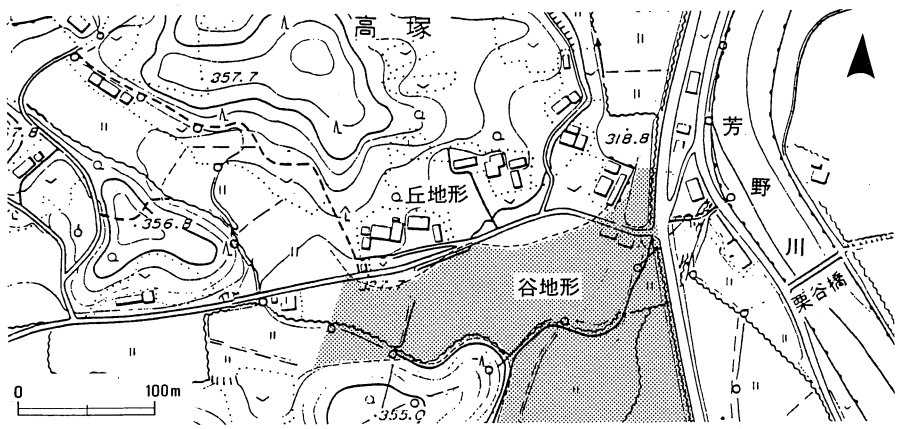
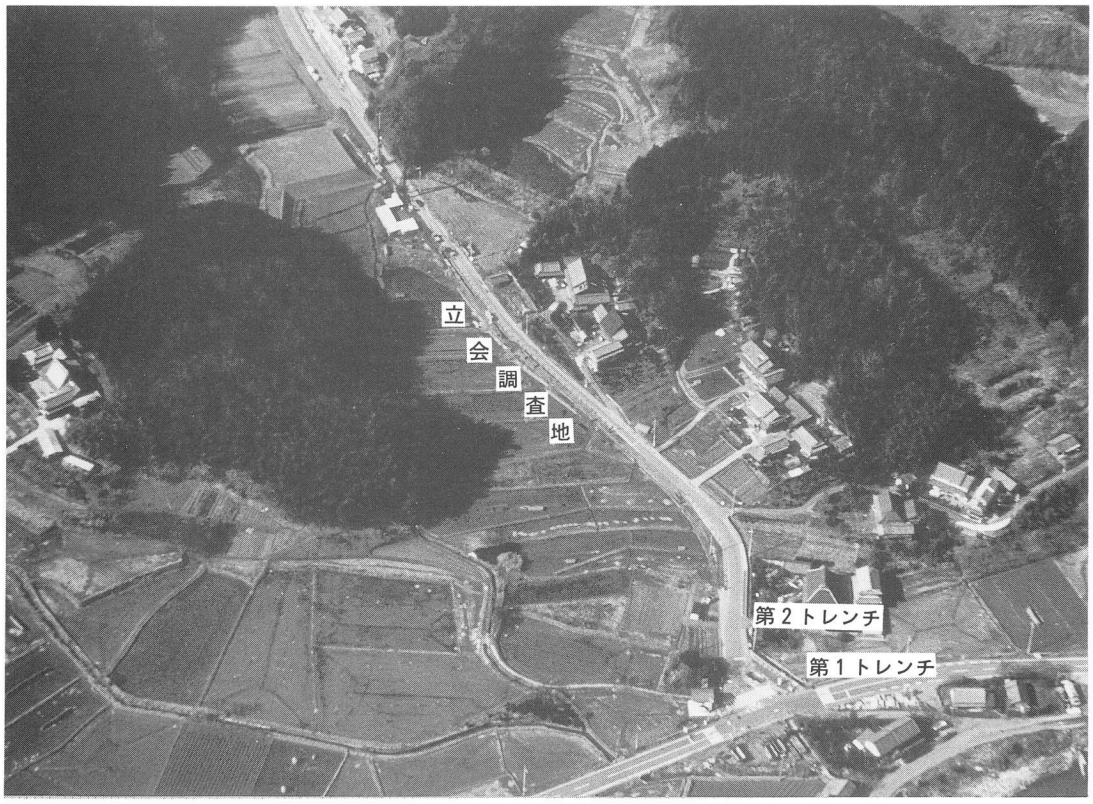


図10　高塚遺跡旧地形復元図

図　版
1981年撮影

図版一　高塚遺跡航空写真

高塚遺跡全景（1987年撮影）

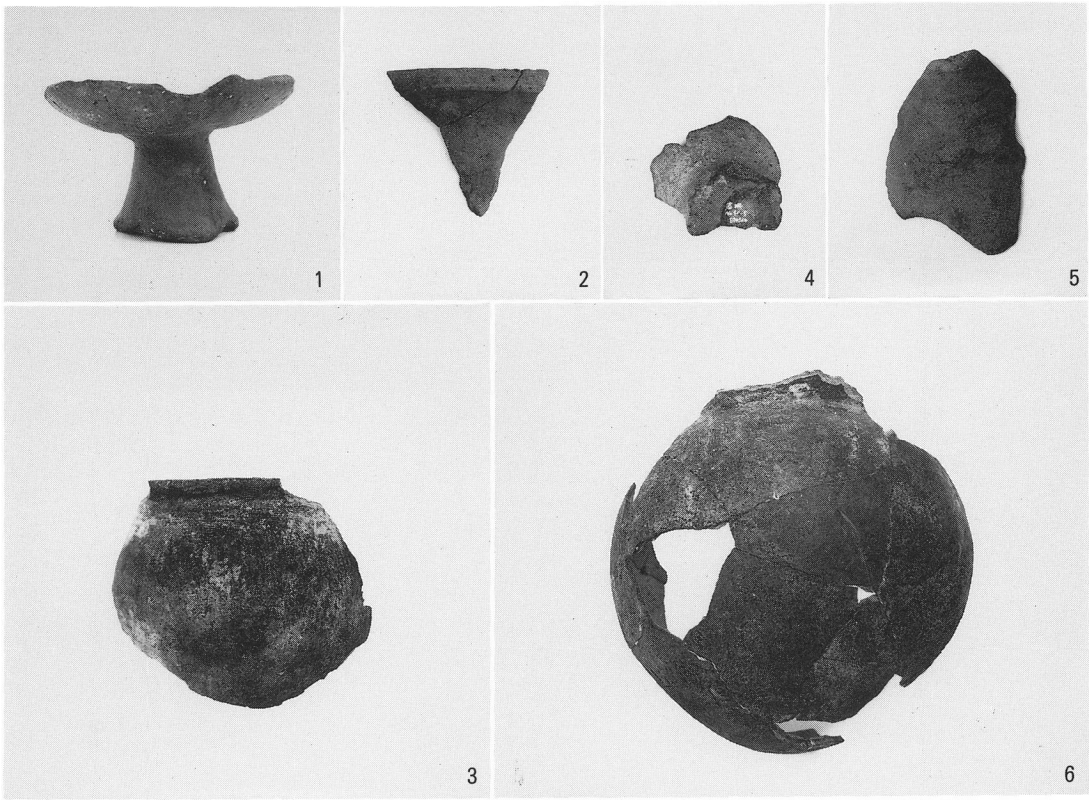


調査地全景（南東上空から）

第１トレンチ（北東から）

第２トレンチ内部（南から）

高塚遺跡出土土器（松岡氏所蔵）



高塚遺跡第２次調査出土土器

図版四　鷹塚・犬塚

鷹　塚（南から）

犬　塚（北から）

高塚遺跡第２次
発掘調査概要報告書

榛原町文化財調査概要　3

1989年　3月31日　発行

編集
発行　榛原町教育委員会
奈良県宇陀郡榛原町大字萩原164番地

印刷　共同精版印刷株式会社
奈良市三条大路２丁目２番６号